＜　温室メロンにおける防除技術　＞

ケ　スワルスキーカブリダニを活用したIPM

温室メロンの主要害虫であるミナミキイロアザミウマ、タバココナジラミ、ワタアブラムシ、ハモグリバエ類に対して各種の生物農薬が登録されている。ここでは、薬剤抵抗性が発達し難防除害虫となっているミナミキイロアザミウマに対するスワルスキーカブリダニ製剤の利用方法を中心に解説する。

有効成分：スワルスキーカブリダニ（*Amblyseius swirskii*）

特徴：体長は0.3mmで乳白色、アザミウマ類幼虫の他にタバココナジラミの卵や幼虫を捕食する。この他にダニ類や花粉などもエサとし、メロン以外ではナス、ピーマン、キュウリなどの施設栽培で効果が実証されている。活動可能な温度は15～35℃、湿度は60％以上。

利用の前提条件	利用のスケジュール
a　定植後１～２週間後を目安にスワルスキーカブリダニ（25,000～50,000/10a）を放飼する。天敵放飼までの期間は株を注意して観察し、各種害虫が確認される場合には天敵に影響の小さい薬剤を散布し、害虫密度を低下させてから放飼する。 b　ミナミキイロアザミウマが無～少発生時に放飼する。スワルスキーカブリダニはアザミウマの成虫を捕食できないため、害虫が増加してからの放飼では効果が発揮されにくい。 c　放飼後に各種病害虫が発生し、薬剤散布が必要になった場合は「(10)天敵類に対する農薬の影響の目安」を参照し、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。	a　スワルスキーカブリダニは非常に小さなダニであるため、定着の確認にはルーペを用いる。葉裏をよく観察し、葉脈の隙間や葉面を乳白色のダニが歩き回っていればカブリダニが定着している。 b　ハウス内の巡回や粘着トラップを使用してアザミウマの発生量を常時確認する。 c　葉裏にカブリダニが確認されず、アザミウマ密度が上昇した場合は追加放飼を行うか、薬剤防除に切り替える。 **生物的防除の効果を高める条件** a　育苗は専用の施設で行い、必要に応じて薬剤による防除を実施し、健全苗を本ぽへ定植する。 b　カブリダニ放飼後は薬剤散布を極力控える。コナジラミ類、ワタアブラムシ、ハモグリバエ類対策として、定植時の粒剤などを利用する。うどんこ病に対しては硫黄粒剤のくん煙を実施し、予防に努める。 c　スワルスキーカブリダニが捕食できないアザミウマの成虫対策として、赤色光照射（２　物理的防除法(10)赤色光照射によるメロンのミナミキイロアザミウマの密度抑制を参照）や青緑色粘着トラップの大量設置（100～400枚/10a）を組み合わせる。 d　温室開口部に赤色ネットなどの防虫網を設置（２　物理的防除法(４)防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照）し、アザミウマの野外からの侵入を防止する。